

と呼ばれています。

図4に京都府におけるマアジとカタクチイワシの漁獲量の推移を示しました。これを見ると、マイワシが減少した1990年代以降、マアジとカタクチイワシ増加していることがわかります。このように現在はマイワシからマアジやカタクチイワシへと魚種交替が行われているのかもしれない。ちなみに、1976～1977年頃までの温暖レジームの時代には、マアジ、さば類の漁獲量が多い傾向にありました。

(2) ブリ *Seriola quiqueradiata*

イ 分布・回遊

京都府の冬の代表的な漁獲物の一つに「寒ぶり」があります。ブリは、東シナ海の陸棚縁辺部を中心として九州沿岸から山陰沿岸にかけて産卵し、季節的な北上・南下回遊を行います(図5)。

春に東シナ海で産卵を終えた成魚は初夏に日本海を北上して、日本海北部や一部は北海道沿岸にまで達し、そこで豊富な餌を食べて過ごし、秋から冬にかけて産卵のために東シナ海目指して南下します。この南下する時に京都府沿岸の定置網漁場で獲れるのが「寒ぶり」です。ところが、最近の高水温がこの秋から冬に南下するブリの行動に影響を与えているらしいのです。

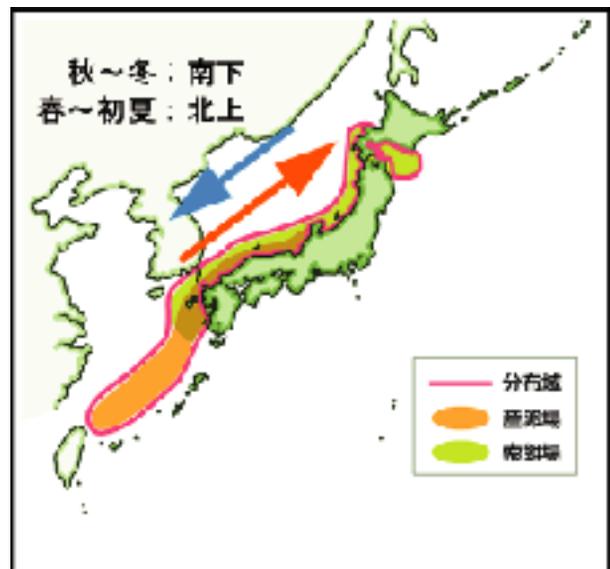


図5 ブリ対馬暖流系群の分布域
(独立行政法人水産総合研究センターによる
平成16年度我が国周辺海域資源評価資料を改変)

ロ 漁獲量

図6に1971年から2002年までの日本海における代表的なブリ漁場である京都府(京都府水産事務所資料)と富山県(富山県水産試験場提供)における冬漁期(10月から翌3月)の「ぶり」銘柄(2才魚以上の大型個体)の漁獲量と、両海域それぞれの漁獲量が占める割合を表しました。

これを見ると、温暖レジームにあたる1976年以前および1988年以降は、漁獲量の多少にかかわらず、両府県の合計漁獲量に対して富山県の漁獲割合の高い年が多いことがわかります。また、1990年代に入ると合計漁獲量は増加しているものの、その多くは富山県で漁獲されており、京都府の漁獲量は横ばいから減少傾向にあるため、京都府の漁獲割合が低くなっています。一方、寒冷レジームにあたる1977年から1988年までは、合計漁獲量に対して京都府の占める割合がその大半を占めていたことがわかります。